

## 「青年、ヨシュア」

2014年05月22日

ヨシュアは目の澄んだ好青年であったと想像する。モーセに率いられたイスラエルの民は荒れ野を放浪し、苦難の中で鍛えられる。そして、目指すカナン侵入の時が近づいてきた。モーセは、カナンの土地を偵察させるために、12部族から1人ずつ12名を選び出す。エフライム族からヌンの子ホシュア（モーセにヨシュアと呼ばれた）が偵察隊に加わる。彼らは40日間、カナンを偵察し、その地で取れたぶどう、ざくろ、いちじくを持って帰ってくる。乳と蜜の流れる土地で採れた豊かな果物を見せ、町は大きな城壁に囲まれ、人は巨人のように大きく、強い。カナン侵入は不可能だと報告する。民は、ここまで来て、剣で殺され、妻子が奪われるのか、エジプトで、この荒れ野で死んだ方がましだと、夜通し声をあげて泣き叫ぶ。その時、ヨシュアとカレブが民に訴える。「我々が偵察して来た土地は、とてもすばらしい土地だった。もし、我々が主の御心に適うなら、主は我々をあの土地に導き入れ、あの乳と蜜の流れる土地を与えてくださるであろう。ただ、主に背いてはならない。あなたたちは、その住民を恐れてはならない。主が我々と共におられる。彼らを恐れてはならない。」ヨシュアは尊敬して従ってきたモーセの神を澄んだ目で見ていた。

祭司エルアザルはヨシュアをモーセの後継者として手を置いて任命した。モーセはピスガの山頂から約束の地・カナンを見渡し、ヨシュアに託して死んでいく。

『ヨシュア記』1章は、神がヨシュアに語った言葉が書かれている。「わたしはモーセと共にいたように、あなたと共にいる。あなたを見放すことも、見捨てることもない。あなたは、わたしが先祖たちに与えると誓った土地を、この民に継がせる者である。わたしの僕モーセが命じた律法をすべて忠実に守り、右にも左にもそれてはならない。この律法の書をあなたの口から離すことなく、昼も夜も口ずさみ、そこに書かれていることをすべて忠実に守りなさい。わたしは、強く雄々しくあれと命じたではないか。うろたえてはならない。おののいてはならない。あなたがどこに行ってもあなたの神、主は共にいる。」

私は、このヨシュアへの言葉に特別な思いがある。高校3年生のクリスマスに洗礼を受けた時、牧師になる決心をしていた。ところが、神学校は洗礼を受けて1年以上、教会生活をしなければ、受験資格がないので、一年、浪人しなければならない。そして、両親は、私が自殺未遂をしたので、クリスチャンになれば自殺しないだろうと受洗には同意した。しかし、牧師になることには大反対で、援助しないとされた。私は独力で神学校に行くことと決め、一年間、新聞配達と集金、夜は二年後輩の高校生の家庭教師をし、お金を貯めた。神学校の入学が許され、上京する前日、牧師に挨拶に行った。その時、牧師は『ヨシュア記』1章を読んで、祈ってくださった。ヨシュアに負わされた重荷には民族の存亡がかかっていた。私は、独力で6年間の生活と勉学ができるかということで、重さには天と地ほどの違いがある。しかし、ヨシュアへの言葉が心に沁みた。右に左に揺れ動いたが、この言葉が神学校生活を支えてくれた。聖書の言葉には力がある。色々な言葉に生かされ励まされてきたが、『ヨシュア記』1章は、私の出発点で、青年を気負わせてくれた御言葉であった。